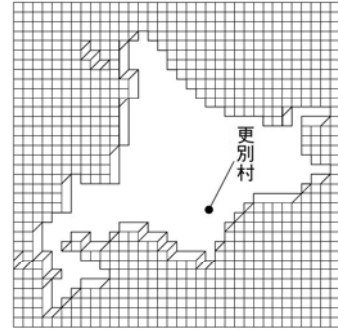


— 連 載 —



あのマチ・地域おこし活躍中
このムラ

更別村の事例

— いつまでも住み続けたいまち

更別村 —

No.70

更別村は、雄大な日高山脈を一望し、広大な十勝平野の真ん中に位置する。農家一戸当たり東京ドーム九個分（約四三・六ha）の農地を有し、畑作四品を中心とした大型農業が行われている。

近隣町村と同様に農業が主な産業であり、この広大な十勝平野の中でどうかすると埋もれてしまいがちなわが村の特色は何か、そんな問いかけを常に発信している村の地域おこしを探る。

地域資源調査事業

1. 「国際トラクターBAMBA」の開催

更別村商工会が「むらおこし事業の先進事例を視察し、地域活性化の手法を学ぶとともに地域内の未利用資源、観光資源等を綿密に調査し、地域内資源を活用した振興計画を策定する。このことにより、地区内の小規模事業の振興を図り、もって地域の活性化に寄与する」ことを

目的として、平成一四年度に道の補助を受け事業実施した。

更別村商工会地域資源調査委員会が設置され、消費の冷え込みやデフレ傾向と厳しい経済環境のなか「村に元気を！活気を生み出そう：」との考えにより、
〃日本列島・十勝平野・更別村〃の流れから、更別村の農観社会を注視する作業から入った。



更別村の特徴を活かす

ある地域活性化の会合の席上、農家の青年から「馬でバンバやってるんだから、トラクターでレースやったらおもしろいべ!」「おくやるべ!」の掛け合いから想起されたのが真相のようである。

成程、一戸当たり平均耕地面積が日本一の農業を誇る更別村において、地域資源の活用として、農家一戸当たり平均約四台のトラクターを所有している現状を鑑みると、大型トラクター



が地平線をバツクに爆走する姿は、更別村でこそふさわしいものであろう。

日本初のトラクターレース「国際トラクターBAMBA」はこうして平成一五年から始まった。

国際トラクターBAMBA

BAMBAは農業用トラクターを馬(メカ馬)に、ドライバーを御者に見立てたバンパ・レース(輓曳競馬レース)。内容は更別村商店街を出場トラク



ターが隊列を組んでのロードパレードとBAMBA競技がメイン。商店街での公道パレードは、日本全国どこにも見られない、威風堂々、胸をワクワクさせ、圧巻そのものである。メカ馬はワックスで磨き上げられピツカピカ!余談だが、各馬の価額を合計すると四億円を超え、それが連なつて轟音を立て、行進していく雄姿を見ると「鳥肌」が立つほどだそう。

イベント会場(更別村ふるさと館周辺)には北海道で唯一帯



広市で開催されているばんえい馬とのふれあいコーナー、メカ馬(トラクター)試乗会、ミニメカ馬遊具コーナー、農業農村整備事業のパネル展などを設置して幅広い催しを行い、地域の将来を担う子供たちへ農業の魅力を伝え、農業後継者育成へつなげる試みも行われている。そのほか、どんぐりステージでは、村の木「柏」を利用し、後世に残る郷土芸能をと、平成三年に発足した「かしわ太鼓保存会」が道内屈指と評価が高い勇壮なさらべつかしわ太鼓を披露している。

BAMBA競技は、カテゴリⅠ(一二五馬力以下)、カテゴリⅡ(一二六〜一四〇馬力以下)、カテゴリⅢ(一四一〜一六五馬力以下)、カテゴリⅣ(一六六馬力以上)に分かれ、各カテゴリに九頭が出

走る。

メカ馬投票

会場の交流出店で買い物をする
と五〇〇円毎にサービス券が
発行され、これをメカ馬券に交
換することができる。各カテゴ



リーの優勝メカ馬をすべて予想
する。賞品は、更別村交流都市
である東松島市の特産品などの
賞が贈呈される。

大会の歴史・規模など

平成二二年の第八回には宮崎
県内で発生した家畜伝染病「口
蹄疫」の被害拡大を防止するた
め、開催の自粛が決断された。

イベントの開催に当たり、関
係指導機関から情報収集し、防
疫対策に関する勉強会を開催し、
病害虫の圃場侵入防止対策や家
畜伝染病の防疫対策にも万全を
期している。一度、侵入を許せ
ば、農業経営に大きな打撃とな
ることから、地域農業を自らの
手で守るという意識改革を徹底
している。

平成二四年第一〇回記念大会
には、村の人口三、四〇〇名弱
に対し、過去最大の一七、三〇

〇名が村に訪れ、道内のうち十
勝管外から約五、〇〇〇名、道
外から約六〇〇名の来場者が
あつたと推計されている。

主催は国際トラクターBA

MBAA実行委員会

実行委員会には、「人と人と
の架け橋」になればとの思いか
ら、多くのボランティアや村外
の方が参加しており、一八六名
が構成員となっている。年齢構
成も一〇代から七〇代までと幅
広く、広範囲な人々の繋がりが
特徴となっている。

農林水産大臣賞を受賞

平成二四年十一月、農林水産
業者の技術改善、経営発展の意
欲の高揚を図る国民的祭典「農
林水産祭」（農林水産省・日本
農林漁業振興会共催）の表彰事
業において、更別村「国際トラ

クターBA M B A 実行委員会」
は、農山漁村でのむらづくりの
優良事例をたたえる「むらづく
り部門」の農林水産大臣賞を受
賞した。同部門の受賞は十勝管
内では初めてである。

本年も、七月一四日に第十一
回大会が開かれる。

2. すももを村の特産 品に

（更別農業高校の活動）

更別村では、かつて「すもも」
の木が農家の庭先など身近にあ
り、生活に潤いを与えていた。

そんなすももを村に蘇らせよう
と昭和五八年にすももの里づく
りが始まり、「さらべつすもも
の里」設立準備委員会が苦心の
末、二・五haのすももの果樹園
をどんぐり公園の隣に作り上げ、
当初はオーナー制度により運営



○年度からすももの加工品開発に取り組んできた。役場もすももの収穫協力、役場内にすもも加工品（ヨーグルト）臨時販売スペースを設置して販売に協力したり、学校給食へのすももパン提供にかかる調整、村内での発表会の開催に労を惜しまず協力する一方、本年から定期イベントとして「すももの里まつり」を開催するに及び、村民上げてすもものPRに努めている。

「専門高校Powerupプロジェクト」推進事業

していた。オーナー制度が終了し、更別村では新たな展開として、すももを使った加工品の開発と特産品化に目を向け、北海道更別農業高等学校（以下、更別農業高校という）に協力を要請し、更別農業高校では平成二

「更別農業高校では平成二二年から北海道教育委員会の「専門高校Powerupプロジェクト」推進事業（平成二二年度から平成二三年度）の指定を受



け、更別村特産のすももを食材とした商品開発を行っている。



平成二二年三月に帯広畜産大学と包括連携協定を結び、地元の小麦や乳製品などの農畜産物も有効活用することができすももを利用したオリジナルパンの開発を始め、商品化・事業化に向けて、役場、帯広信金（地



元高校生による十勝の未来づくり応援プロジェクト）、地元パン工房（有限会社エヌアイエルパン舎）とも連携し共同研究を行ってきた。

すももの収穫や加工も自分たちで行い、大学の指導のもと「すもも」の栄養成分と食品機能性の分析も行った。

開発したすももパンの試食会

は五回にわたり実施（平成二二年十一月～平成二三年二月）し、その間、更別村のパン舎の代表取締役吉田美佐子氏の指導を仰ぎ、第五回の試食会では北海道物産展のカリスマバイヤーとして知られている、帯広信用金庫がアドバイザリー契約を結ぶ株式会社オフィス内田の内田勝規氏にアドバイスを受けた。

五回の試食会の実施を通して、すももパンの改善及び販売のアドバイスを受けたことから、平成二三年三月に幕張メッセで開催されたFOODEX JAPAN 二〇一一年において実際にすももパン二種の試食とアンケートを実施し、すももパンの改善をさらに図った。

この結果、最終の成果品として、「スモモ・デ・パティシエール」というすももの酸味をいかした甘酸っぱい菓子パンを

商品化することができ、地元小学校の給食として提供したり、更別村のパン舎にて日曜日限定で販売するなど定番商品化に向けて活動中である。

「専門高校 Skill up プロジェクト」推進事業

平成二四年から北海道教育委員会「専門高校 Skill up プロジェクト」推進事業（平成二四年度新規事業）の指定を受け、更別農業高校では、新たに更別村産の小麦「きたほなみ」と



すももの砂糖煮や地元の枝豆、人参、カボチャの規格

外野菜を使った焼ドーナツに挑戦。帯広信金の紹介で帯広市の洋菓子店「あさひや」の指導を受け、レシビの改善を図ってきた。ドーナツは「SARADO（サラダ）」とネーミングし、開発したのはすもも味と野菜三種の二種類で、はちみつや水あめなどを使い、しつとりした食感に仕上がっている。平成二五年

帯広信金との「地元高校生による十勝の未来づくり応援プロジェクト」は、①定期販売の実施、地元企業への提供などSARADOの事業化と②新たな連携先の開拓、消費者ニーズの調査などを行い、更なる新商品の開発と事業化を本年度の課題として上げている。

〈取材後記〉

更別村に総務省支援制度に基づく地域おこし協力隊員二名が採用され、本年三月に着任されました。それぞれ観光支援、特産品開発支援の任に当たられるとのことで、勿論、志は高いのでしようが、見知らぬ土地に飛び込み、これから幾多の障害にぶつかるやもしれません。本連載と同じ名を名乗られる縁からご活躍を祈念いたします。

一般社団法人 北海道地域農業研究所

特別研究員 西野 義隆